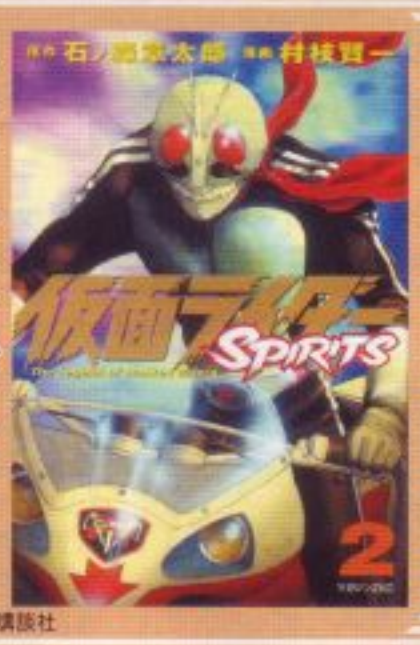
熱き優しきオトコたちを描き続けてきた村枝賢一先生のコミックスをぜひご覧ください!

「RED」第1巻～第8巻（講談社）
「仮面ライダーSPIRITS」第1巻～第2巻（講談社）
「BIBLE」（講談社）
「佃島パイレーツ」全2巻（小学館）
「光路郎」ワイド版 全4巻（小学館）
「かもしか!」全6巻（小学館）
「俺たちのフィールド」全34巻（小学館）
「俺たちのフィールド 外伝」（小学館）
「俺たちのフィールド」ワイド版 第1巻～第7巻（小学館）

※仮面ライダーSPIRITSの最新情報はココでチェック!
http://www.kodansha.co.jp/zhp/hp.htm

時代が望む時、仮面ライダーは必ず蘇る。平和が闇に侵されるとき、疾風とともに「変身」の声が悪を裂く!
ニューヨーク、東南アジア、エジプト、ヨーロッパ、そして日本。世界を舞台に彼ら戦士たちは戦い続けた一。リアルタイム世代だけでなく、若年層、女性層にまでライダーブームを巻き起こした傑作マンガ、仮面ライダーの新しい伝説がここからはじまった!



©石森章太郎プロ ©村枝賢一／講談社

オーヴェンの最後に対するレッドの「それでもオレは撃つ」たというのがそうですね。

そうですね。だからやられたモノに対して、戦い追いつめて、それで最後は許してやるドラマも必要ですよね。必要なんだけど、「でもそれだけじゃないよな」っていうところをちょっと描きたいところがあるんですよね。まぁ大変ですけど。

次に「仮面ライダーSPIRITS」についておたずねしたいんですけど、この作品を描くきっかけを教えてください。

きっかけというか…。「仮面ライダー」が好きだったんで、当時は描けるなんて思っていないんですよ。でも落書きは貯め込んでいるんですよ、仕事中の息抜きに「仮面ライダーを描こう」って、描いたのが結構貯まっていて、それを他の原稿を取りに来た今の担当の方が見て、「ライダーが好きだ」って話しが出て、「じゃあ、今度まったあいましょう」って話しが出たんですよね。それが3年ちょい前ぐらいで、担当の方がコピーを持って帰られて、TVマガジンのスタッフの人に見てもらおうという話しをして、持っていったところで一旦話しは止まっていたんですけど。

知らないところでなんか話しはまわりにまわって、テレマガの当時の編集長からどうも石森プロに話しが行っていたらしいんですよ。

先生はその流れを知っていたんですか?

知らない、知らない(笑)。まぁ、やれたらいいなって言いながら、「バカな」って感じでいたら、クウガが始まる直前にいつ会いに来るんだって話しが逆に電話で来ちゃったんですよ。

それでゼクロスという、TVシリーズに唯一なっていないライダーなんですが、どれをやるのも、もう入り込めない出来にTVシリーズはなっているし、原作ももうあの続きを書くことはないだろうって出来になっているけど、不遇な位置にいるゼクロスだけでも、描けたらいいかなって(笑)。そしたらファーストから描かないんですか?」って言われて、

石森プロから?

ええっ、で「描いていいんですか?」みたいな(笑)。それで話し振られたんですけど、やるとしたらこんな話しからって、貯め込んだモノがあるじゃないですか。それで石森プロさんとは初対面の際、お互いに緊張しているんですけど、このままじゃナンも決まらないなぁって思って、もうなんだろう、初対面で片方が喋っているなんかこっぱずかしい状況でもいいから、自分の考えで話しを言う、言うべしって思って、全部最初から最後まで、最終回までの流れを話して、そしたらなんか反応が良かったんですよね。「いいんじゃないんですか」って。

実際に描くって決まったときの感想はどうでした?

そりゃあ…、うん、ワクワクしましたよね。自分の実力はさておきっていうぐらい浮かれちゃいましたよね。「ホントにいいの?」みたいなところがあって、だから逆に決まっちゃったら決まっちゃったで、プレッシャーがかかりましたね。「これはちゃんと描かなきゃなぁ」って。

やっぱり今までのライダーのファンに対するプレッシャーですか?

ですね。自分もファンなのでうるさいのは分かっていますから、だからライダーファンに好まれる描き方っていうのは、相当気を遣ってやりましたね。だけどこれまでの人たちはせっかく自分でやるから、自分のカラーに近づけたり、独自の解釈の造形を入れたり、意外とやってきた部分があると思うんですよ、その時代的に。だけどそれはその時代だったから良かったけど、今それやったら、ファンになんて言われるかわかんないけど、「自分までなんて言うかわかんないな」ってみたいなところがありましたね。またそのままやったって絶対大丈夫だというのもあったから。

実際にどんな苦労がありましたか?

なんだろう。…風見志郎がグルって振り返ってベルトのバックルが見えたとき、「あぁ、ベルトのバックル何色だったかなぁ」って(笑)。ビデオを見直したり、あとやっぱり映像では捨えない造形のモールドがあって、それとかはもう血眼になって、スチール写真でしかわかんないところもあるし、角度も全部ある訳じゃないし、あれは困りますよね。

まぁ設定資料は石森プロさんに用意してもらって、自分でも好きだったので資料を持っていますから、それでなんとか。

シナリオとかストーリーを決めるにあたっての苦労とかは?

そうですね。好きだから元々あった引き出しはあるけど、さっきと同じように、それは自分の妄想の中での引き出しだから、コレを人に見せたら大丈夫かなって、そのすりあわせが大変ですかね。なんだろう、目の前にうーんと考えて、うっとりするレベルだけならばいいけど(笑)、世の中に出るじゃないですか。だから「出してもいいのかなぁ、こりゃ」って、考えちゃいますよね。で、どのライダーも世代がバラバラにいて、どのファン層もいるんで、どのライダーもたてていきたいというのが厄介ですね。

実際、それぞれにファンがいますからね。

そう。だから、全然思い入れもないよ、知らないよ、というヤツも、メチャクチャマニアだよ、というヤツも同時にお客さんじゃないですか、これは大変ですよね。だから初めて見る人にも分かるように、百も知っているヒトにも納得いくように、そんなの同時に出来るのって矛盾しているじゃないですか。だから矛盾しているんですよね(笑)。

だから毎月毎月分けて、一人ずつこなしていって、最後の長編は最も不遇だったライダーに当てるというところが、納得していただけるんじゃないかと。

ところでこの作品を見て、私自身ビデオ屋に行って、レンタルビデオを借りて、「滝和也はどんなヤツなのか」とか、チェックしたりしたんですけど。そういう反応は素直に嬉しいですか。

ええ、術中にハマっていますね(笑)。実際、過去の作品は消えていくじゃないですか、仮面ライダーはそれでもかなり粘っているほうだと思うんですけど、それでももう一度蘇るというか、記憶に、というか新たに伝えるというか。その石森プロの、東映の残した功績をもう一度伝えたいな、みたいなところがあるんでビデオを見てもらっているのは、もうまんまと嬉しいですよ。

次にストーリーの話しですが、場所とか、周りの登場人物にオリジナルの設定があるじゃないですか。1号のNYのような、あぁしたシナリオ、キャラクターを考えるきっかけというのが何なのか教えていただきたいなと、何故1号はNYなのかとか、2号は…。

あれはもともとのオフィシャルの設定にあるんですよ。1号はNYに行っていたことがあるって。世界中の悪を相手に、常に外国で仮面ライダーは戦っているって。比較的どこに出没しているかってデータもあるぐらい。だからなるだけそれにそってやっています。

ライダーマンはタヒチにいたという設定ですが。

あれはテレマガの囲み記事にあって、いつ何が公式になるか分からない時代だったんで、テレマガとか学年誌で、タヒチに流れ着いた説と、サハラ砂漠に落ちた説と、宇宙空間を漂っているところを1号・2号に助けられた(笑)っていうのがあって、「宇宙空間はねぇだろう」って(笑)。砂漠もV3でやっちゃったんで、じゃあタヒチでやろうかなって。

一つ聞きたいことがあったんですけど、マンガ家の椎名嵩志さんに最初この企画を話したときに、説明を聞いた椎名先生が「すげぇー」って興奮したって聞いたんですけど、もう出ていたら、そこの部分はどこですか。

ストロンガーの、おやっさんとうるんで、タックルの墓守をしているところですね。

担当さん：最初の話しでは城茂引きこもっていたんですよ、戦いにもいかず。墓守だけを、花の咲かない墓に毎日花を捧げるのだけを仕事にしていたところを襲われるんですけど、戦って勝ったら、花が一輪咲いていて、「ああっ、行けって」ことか、「コリ子」って、そうして旅立つというのが話しだったんですけど。まあそれだと「城茂はひきこもりかい」(笑)っていうんで、それは違うっていうことで(笑)。

セリフを言いながら下りてくるシーンなんて、知らないボクでも「おぉー」ってな感じで、ファンの方には「これだよなぁ」って感じでしたね。

いやぁ、ヒーローものって、カッコいいとカッコわるいのスレスレなんですよね。照れてやっちゃうとダメなんですよね。

そのあたり難しいですよね。ダサいか、ダサカッコいいか。

そうそう、ダサカッコいいは普通のカッコいいの上をいくんですよ。元々ストロンガーがメチャクチャ強い、悪に名乗りを上げるぐらい余裕がある強さ、そこのところをどういじらずいじるかみたいなところなんで、ボロボロで、もう死にそうなのに見栄を切るというのがカッコいいよなというのはありましたね。

描いていて「これはやったな」、「俺はやったぜ」というのが、あると思うんですけど。印象的なシーンとか。

いくつかあるけど、一つにするんなら、なんだろうなぁ…。やっぱり「今夜はお前と俺でダブルライダーだからな」ですかね。あぁしたセリフが先に来たときは大体うまくいきますよね。名言がある、ないって結構こだわっていますよね。あるとそこから話しがぎゅっとまとまるんで。

ところでさしつかえなかったら、どれぐらいのペースでいま描かれているんですか? 結構コレ、ファンの方は「村枝先生、体調大丈夫か?」って心配しているみたいなんで。

ギリギリ(笑)。簡単に言うとRED1週間、1週間、1本ずつ2週間で上げて、残り2週間でライダーを上げるつもりで…。まぁ、それが理想なんですけど、全部グイグイ押しちゃっているんで、みんな「五日しかないよ」、「1週間しかないよ」みたいになっちゃうんですけどね(笑)。

2本持っていると、片方を描いているときに、もう片方が浮かんだりしないのかなって思うんですが。

しますよ。でもそれって全く別のアタマなんで、そのアイデアが出るときは別の仕事をしていても貯めちゃうし、意外と2本やっている方が精神分裂症なのかもしれないけど、具合はイイっすね(笑)。ただ前は週刊と隔週だったので、それは正直言って、自分の能力的にキャパ超えちゃったんですよ。アレはきつかったですけど、いまはあれより楽だなって感じですね。

週刊・隔週がギリギリアウトなんですよ。週刊・月刊、隔週・月刊、これはできますね。なにせ俺の師匠が吉田聡さんで、たくさんやるヒトなんで、俺が仕事しているときにずっと連載3本やっていたのを見ていたもんだから、なんか1本だと悪いのかなって思って(笑)。だって俺、週刊連載やっているのに師匠と電話しているとき、「おまえ怠けているぞ、マンガキライだろ!」(爆笑)って。

そんなに先生が早いとアシスタントも大変ですね?

メチャクチャ早いですよ、だからアシスタントも早くて、その時に早いのが身についたというところがありますね。

現在描いているような内容の濃い作品を描く際に気遣っていること、例えばBGMとかありますか。

いつもBGMはその作品をイメージするモノをかけるようにはしてますよ。他になんだろう。…もっとね、絵が上手くなりたいんですよ。だから自分が、こんなのを描いたことがない、描けるんだろうかという線を常に自分にもスタッフにも要求していますね、上手くなりたいし。マンガって「内容だよ」、「キャラだよ」って言う方が業界によくいますけど、俺ねぇ、やっぱり絵は大事だと思うんですよ。絵の力を、絵の技量をあげたいなあって挑戦しているところはありますよ。

ちなみにBGMはやっぱり仮面ライダーをかけているんですかね。

かけてますね。レーザーディスクもかけてますよ。

最後にファンの方に一言お願いできますか。

楽しく読んでいただくのが一番で、もちろんそのつもりで書いているんですが、楽しく読んでいただきたいのと同時に読んで、感動していただければ幸いですよね。泣くも怒るもありで、楽しいだけじゃなく。みなさんの期待を裏切らないように頑張っていきますから。

取材日 11月4日
協力 ヤングマガジンアッパーズ編集部 月刊マガジンZ編集部